

表2 類の文字(ドローヌの記録)

o touo 「救い」	⊕ nja 「美しい」	⊕ sou (?)
⊕ che 「食事」	⊕ và 「頂」	⊕ i 「上衣」
⊕ ma (数詞)	⊕ lou 「大樽」	⊕ tseh 「励ます」
⊕ pièh 「熱病」	⊕ tsouò 「脂肪」	⊕ i 「上衣」
⊕ pih 「畏れさせる」	⊕ tsòh 「酢」	⊕ i 「寝床」
⊕ nieu 「猿」	⊕ t'so 「押し込む」	⊕ ma (数詞)
⊕ bo(u) 「飾った」	⊕ hè 「鼠」	⊕ mi 「飢える」
⊕ hié 「針」	⊕ hè 「鼠」	⊕ vo 「怒り狂う」
⊕ nié 「乳房」	⊕ tsa 「熱い」	⊕ tsè 「鹿」
⊕ su(ou) 「血」	⊕ tsih 「塩」	
⊕ nze 「咬む」	⊕ gue (?)	

注) ここでドローヌが(数詞)と訳しているのは、助数詞(類別詞)のことである。

- 1) 上下結合: ⊕ ni33 「心」, ⊕ ne33 「黒い」
- 2) 上中下結合: ⊕ dzi33 「太陽」, ⊕ kho33 「6」
- 3) 左右結合: ⊕ tshi33 「輩」, ⊕ si33 「樹」
- 4) 左中右結合: ⊕ zi55 「魂」, ⊕ tsa55 「食わす」
- 5) 包囲結合: ⊕ lo33 「石」, ⊕ zo33 「学ぶ」

次に、表現する意味・音形と関連して造字法を考察する場合、いわゆる漢字の六書りくしょを基準にすると便利である。彝文字の造字の基本は象形であるほか、会意・指事かしや・仮借の法も使われている。

1) 象形字 ドローヌが紹介した喜徳の彝文字(表3)にも、象形字は数多くある(いずれも第I類に属する)。

彝文字の表意文字起源説は、フランスの研究者ポール・ヴィアール(Paul Vial)によって早くから提唱された。彝文字は当初、表意文字として使われたが、発展の過程において音節の表音字となり、その後それが主流を占めたとヴィアールは考えている。そして、撒尼彝文字の中で今なお表意的な風格を保持する表4の44字をあげて、その説の例証とした(以下、ヴィアールの表音を改めていない)。

ヴィアールのあげる上記の44字の中には、一見して象形的な性格を感じとれない例も少なくはない。しかし、一方で、彝文字の大きな特徴の1つは、1つの音節を表記する字形が、多くの場合、1つに限られていないことである。それに加えて、たとえばmaを表記する字形がいくつかある場合、その中のどれを使っても差し支えがないというのではなく、どの意味にはどの字形を使うかが大体決められている。

ヴィアールはmaを表記する文字として、 マ , ϕ , ⊕ の3字をあげるが、そのうち、「竹」には必ず ϕ mà

表3 喜徳の彝文字(ドローヌ)

⊕ o, ou 「蛙」	⊕ tsè 「節」
⊕ tsou 「人」	⊕ hom' 「尾」
⊕ ha, ha bou 「山」	⊕ hm(ou) 「馬」
⊕ 'vah 「岩」	⊕ goù 「鋤」
⊕ ze 「粒」	

を使い、「女性(雌)」には マ màを、否定を表現するには ⊕ màが使われるというように、使い方が定まっている。この事実から、 ϕ は本来竹の象形であり、他の2つは別の象形字からの仮借であろうと理解できる。

同じように、撒尼彝語 lou /lu/を表記する字形に、 ㊦ , ㊧ , ㊨ , ㊩ , ㊪ の5字がある。しかし、「石」の意味では必ず初めの字形が使われる。これは明らかに石の象形である。

これらの事実は、彝文字が表意文字として機能していた時代の名残りとして、大きな意味をもっている。

2) 会意字 彝文字の会意字形は、1つの単体字に別の単体字を加えただけのもので、会意字の条件を備えたものが少ない。地域的(貴州)なものという見方もある。たとえば、次のような例がある。

㊫ xu33 「湖、海」は、 ㊬ thu33 「厚い」と ㊭ zi33 「水」「厚い水」からなる。

㊮ , ㊯ mu55 「孵化する」は、 ㊰ または ㊱ 「鳥」の略体字と ㊲ ho33 「卵」からなる。

㊳ hi21 「八」は、 ㊴ hi33 「四」の重複からなる。

3) 指事字 彝文字の指事字数は少なくないが、次の例がある。